

光と影 引き受けるひと

北海道 木村 晃子

フリーソーシャルワーカー



この世の中には、楽しいことばかりではなく、苦しいことも切ないこともたくさんある。自業自得なこと、理不尽なことも当然ある。

様々なことに出会いながら私たち人間は生きているのだ。自分が幸せな時には、もしかすると、誰かが不幸せを引き受けてくれているのかもしれない。自分が悲しみに暮れている時には、もしかすると、誰かの分の悲しみを引き受けているのかもしれない。

～突然の離婚～

それは、春の終わりだった。リョウタは、もうすぐ小学校3年生になろうとしていた。春休み前の日曜日には、両親と妹と遊園地に行き、楽しい時間を過ごしていた。

ところが、春休み一日目。突然、母から驚きの告知を受けた。「お母さんと、お父さんは離婚をすることになったからね。あなた達は、しばらくの間、おじいちゃんのところに行ってね。」

リョウタには、意味がわからなかった。つ

い先日の、あの遊園地はなんだったのだろう。あれが家族一緒の最後の思い出になるとは想像もしていなかった。確かに、あの遊園地の後、父と母が夜に喧嘩をしているのを聞いたことはあった。ただ、それは、リョウタの家ではよくあることだった。

「何故、離婚するの？」リョウタは母に尋ねた。すると、母は言った。「もう、嫌なのよ。」それだけだった。「何故、おじいちゃんたちのところに行くの？お母さんも一緒に行くよね。」リョウタは次の質問に移った。「お母さんは、新しくアパートを借りて、新しい仕事を探すことになるの。少し、落ち着いてから、リョウタとゆうを迎えに行くから。」と言った。ゆう、というのは、妹のことだ。「落ち着いたらってどの位？」リョウタには気になることがたくさんある。「まだ、わからない。とにかく、春休みの間に、荷物をまとめて、ここから出ていくことにしてあるから。」と母は言って、すぐに、部屋の

中の片づけを始めた。

リョウタの母は、いつもそうだった。リョウタの家で決まることは、大抵、母が決めていた。母の決定が告知され、家族は動いた。今回のことも、リョウタにはさっぱり事の運びがわからなかった。小学校に上がる前の妹のゆうは、もっとわからないはずだ。

その後、リョウタとゆうは、少し離れた祖父母のところに預けられた。当然ながら、リョウタは祖父母の暮らす地域の学校へと転校することになった。

新しい学校生活は、窮屈だった。祖父母の家から通学するリョウタを友達は不思議に思った。学校生活にはなかなかなじめず、途中まで通学しては、家に戻ったこともあった。祖父母は、リョウタをなだめながら、何とか学校に通わせたものの、母を恋しく感じていることが、ありありとわかると、リョウタを見ているのはつらかった。

夏休みが終わるころ、リョウタと、ゆうは母に引き取られた。元の学校に戻ったリョウタは、再び友達との学校生活を楽しむことができていた。ところが、母の仕事の帰りが遅くなることも多く、就学前のゆうの世話が十分にできないことから、ゆうだけは祖父母の元へ戻ることになった。リョウタは、夕方まで友達と遊んでいた。夕飯は、ほとんどが、コンビニのお弁当だった。帰宅した母は、いつも疲れていた。リョウタの話に耳を傾ける余裕もないようだった。そして、時折、夜遅くに出掛けていく。

そんな毎日の中で、ある日、母親が見知らぬ男の人を連れてきた。「お母さんの大事な人だから。おじさんに挨拶して。」と言う。その時から、リョウタの家には、母の大事なおじさんが一緒に暮らすことになった。

母は、リョウタには、お弁当を持たせるが、おじさんには、手料理を作っていた。母は、リョウタの学校の話は聞かないが、おじさんとは何かを楽しそうに話していた。いつしか、リョウタは、母とおじさんが帰宅すると、自分の部屋にこもるようになった。

ゆうが、リョウタたちのところに戻ることはなかった。祖父母が育てていた。リョウタは、次第に自分の居場所がなくなっていくような気持になっていた。

夕方まで、友達と遊び、友達が家に帰りだすと、一人で繁華街を歩いた。ふらっと入ったゲームセンターは賑やかだった。リョウタよりも大きな、中学生や高校生らしき集団が遊んでいた。お金を持たずにゲームを眺めていたリョウタに声をかけてくる中学生がいた。リョウタは嬉しかった。そして、自分よりも年上の少年たちの姿が格好良くも見えた。

少し遅くに家に帰った。母とおじさんは、居間にはいなかった。そして、テーブルには、母の財布があった。ふと、リョウタは財布を手に取り、千円札を抜き取った。そんなことをしたのは初めてだった。

翌日の夕方、リョウタは千円を持ち、ゲームセンターへ行った。いつもの少年たちに近づいて、リョウタもゲームをした。「お前、下手くそだな。」と少年たちはリョウタをからかった。それでも、リョウタは楽しかった。

家に帰ると、居間には、母とおじさんがいた。リョウタは少しがっかりした。お金がない。明日は、ゲームセンターに行ってもゲームができない。あの少年たちに話かけてもらえないだろう、と思った。

翌朝、リョウタは仮病を使った。学校を休

むと言うと、母は、何か買って食べるように、テーブルの上にお金を置いて、仕事に出た。リョウタは、母が出かけたのを確認した。そして、昼間からゲームセンターへ向かった。昼間のゲームセンターには、いつもの少年らはいない。リョウタは一人でゲームをした。手元のお金はすぐに無くなってしまった。リョウタはゲームセンターを出て、繁華街をうろうろと歩いた。やがて、夕方になってくると、少しずつ人の通りが増えてきた。その日は、金曜日の夜とあって、他の曜日より、人の出が多いようだった。

夜が更けてきたゲームセンターの中で、リョウタは、うろうろと人ごみの中を歩きまわった。ふと見ると、ゲームに夢中になっている男性のズボンのポケットから、財布が出ていた。リョウタの視線は、その財布の方に向けられた。すうっと伸びたリョウタの手・・・

～それからのこと～

あの日から数年が経った。リョウタの行方は母親にもわからない。妹のゆうは、祖父母に育てられ、高校を卒業して就職したものの、年老いた祖父母の元を離れるのが忍びなく、祖父母との暮らしは続いている。

母親は、あの当時家に連れてきたおじさんとは、別のおじさんと一緒に暮らしている。リョウタと同様に、ゆうも母の元へは寄り付かなくなっている。それでも、母は元気そうに幸せそうに暮らしている。

子どもにとって、親は大切な存在だ。どんな親でも大好きだ。リョウタもゆうも、大好きな母親の幸せのために、自分たちの欲しいものをあきらめていたのかもしれない。どこかで、元気にいてほしいと、老いた祖父

母もまた、胸を痛めている。

光と影。リョウタの母は、何を引き受けていたのだろう。

*事実に着色したフィクションです。